日本医療薬学会平成19年度がん薬物療法海外派遣研修参加報告

京都大学医学部附属病院薬剤部　橋田　亨

１．43 rd ASCO Annual meeting　June 1-5, 2007 McCormick Place Chicago, Illinois（第43回米国臨床腫瘍学会年会）について：今年の参加者は３万人を超え、全体の約半数は米国以外からであることから考えると、事実上の国際臨床腫瘍学会であったといえる。学会としてのコンセンサス形成の流れは、Scientific Program Committeeから選ばれた科学的に最も優れた演題がPlenary SessionやOral Abstract Presentation Sessionで発表され、発表直後にその内容に対するDiscussantsの評価を経て、さらに翌日のHighlight of the dayで重要な発表をまとめて周知が図られる。それが日を待たずしてインターネットを介し最新のエビデンスとして世界中に発信されていくまでの課程を実感することができた。進行肝細胞癌において分子標的薬Sorafenibが生存期間を延長することを明らかにしたSHARP試験や進展型小細胞肺癌における予防的全脳照射が脳転移の発症を抑制することを明らかにしたEORTC 08993-22993試験の結果など、今後の治療選択に大きな影響を与えうる大規模第Ⅲ層臨床試験に注目が集まっていた。また、日本国内で実施された進行胃癌に対するJCOG9912試験、SPIRITS試験の結果がOral Abstract Presentationで紹介されたことも印象深かった。

２．Clinical Exchange Program at The University of Texas M.D. Anderson Cancer Center on Jun 6-8,　2007 （MD アンダーソンがんセンター研修）について：集学的治療の範囲は広く、緩和医療、ソーシャルワークの充実ぶりとヨガ、針治療、食事療法などを統合的に治療に取り入れ、がん患者の QOL 向上を実現しているのが印象深かった。薬剤部では最高水準のがん薬物療法を安全に提供するために、常勤職員 415 人（薬剤師 230 人・臨床薬剤師 50 人）という人員により２ー３交代勤務の 24 時間無休体制がとられていた。一方で、医師から信頼を受けた臨床薬剤師は、診療ガイドラインとクリニカルパスに基づき、がん疼痛緩和や支持療法の処方立案を任されていた。医療制度や規模の違いはあるが、今後日本のがん薬物療法における薬剤師の役割について考える上で示唆に富んだ経験となった。

本研修に参加する機会を与えられたことに心より感謝し、我が国のがん領域における薬剤業務の進展のため、得られた成果を還元することに努めたい。